

高等学校 地理歴史科  
文部科学省検定済教科書  
35・清水・日探704

高等学校

# 日本史 探究

新視点による日本通史と  
アジア・世界



清水書院

## 第1編 原始・古代の日本と東アジア

10

## 第1章 黎明期の日本列島と歴史的環境

- 1 日本列島域の旧石器文化とはどのようなものか ————— 12
- 2 縄文人はどのような暮らしをしていたのか ————— 14
- 3 弥生人はどのような暮らしをしていたのか ————— 16

## 第2章 歴史資料と原始・古代の展望

18

## 第3章 古代の国家・社会の展開と画期

## 第1節 古代国家の形成と東アジア

- 4 倭国は東アジア世界とどうかかわったのか ————— 20
- 5 前方後円墳は何をあらわしているのか ————— 22
- 6 ヤマト政権はどのように倭国をまとめていたのか ————— 24
- 7 飛鳥文化を生み出した背景とは ————— 26
- 8 律令国家はどのように形成されたのか ————— 28
- 9 律令体制の仕組みとは ————— 30
- 10 奈良時代の政治はどのように推移したのか ————— 32
- 11 天平文化を生み出した背景とは ————— 34
- 女性の歴史 ① 出土資料にみる先史時代の女性 ————— 36
- もっと知りたい日本史 ① 奈良時代の政治史と木簡 ————— 37

## 第2節 古代国家の推移と社会の変化

- 12 律令政治の再建はどのようにおこなわれたのか ————— 38
- 13 平安初期の文化はどのような国際環境で育まれたのか ————— 40
- 14 摂関時代の政治はどのように推移したのか ————— 42
- 15 東アジアの変動と国風文化にはどんな関係があるのか ————— 44
- もっと知りたい日本史 ② 仏像からみる古代史 ————— 46
- もっと知りたい日本史 ③ 国風文化を生み出した東アジアの変動 ————— 47

## 【凡例】

- 年代は西暦を主体に、年号（元号）を（ ）で示した。ただし、おもに世界史にかかわる年代には年号を示していない。改元の年にあたる場合、原則として改元前のできごとは旧年号と新年号を併記し、改元後のできごとは新年号のみとした。また、一世一元の制となった明治時代以降は、1テーマに1か所とした。
- 陰暦と西暦との間には、月日にずれがあるが、太陽暦が定められた1872（明治5）年以前は陰暦の年月日にあわせ、西暦の年はそのときの陰暦の年と大半が重なる年を示した。例えば、日露和親条約の調印は1855年2月7日であるが、陰暦では安政元年12月21日であるため、「1854年」とした。
- 引用した史料は、学習上必要な範囲にとどめた。その際、「前略」「後略」などの表記は省略し、「中略」は「…」で示した。また、原文は、句読点や濁点を付したり、漢字を仮名に改めたり、常用漢字にかえたりした場合がある。おもに近代以前の史料には適宜口語訳も付したが、その際は中略の「…」を省略した。

- 歴史理解に必要な人物については、原則としてその初出に生没年を示した。なお、天皇・皇帝は在位年間（院政の上皇はその期間）、将軍は在任期間とし、在〇〇～〇〇であらわした。天皇の死後、皇后や皇太子が即位せずに政権をにぎることがある（称制）が、その期間は、称制〇〇～〇〇と表示した。
- 中国の人名・地名の読み方は、日本語の慣用にしたがった。ただし、地名と近代以降の人名には、初出にのみ原語読みを併記した。
- 朝鮮の人名については、原則として近代以前は日本語の慣用にしたがいが、近代以降は原語読みを基本とし、初出のみ日本語の慣用読みを併記した。朝鮮の地名については、現在もある地名は原語読みにしたがいが、それ以外は日本語の慣用読みとした。
- 本文で記載した旧国名と江戸時代の藩名については、初出の国名・藩名に該当する現在の都道府県名を付記した。

本書に掲載されているQRコードからは、インターネットを通じて関連する情報にアクセスすることができます。



<b>第1章 中世への転換と歴史的環境</b>	
16 中世社会はどのようにして成立したのか	50
17 国家の武力はだれがになったのか	52
18 中世の国家はどのように形成されたのか	54
19 「武者の世」はどのようにしてはじまったのか	56
<b>第2章 歴史資料と中世の展望</b>	58
<b>第3章 中世の国家・社会の展開と画期</b>	
<b>第1節 武家政権の成立と展開</b>	
20 鎌倉幕府はどのようにして成立したのか	60
21 鎌倉幕府はどのように勢力を拡大したのか	62
<b>もっと知りたい日本史 4</b> 硫黄の交易にみる東部ユーラシアと日本列島	64
<b>地域の歴史 1</b> 東国御家人の移住—西遷御家人・北遷御家人—	65
22 鎌倉仏教の特色は何か	66
23 鎌倉文化の特色は何か	68
24 モンゴル（元）はなぜ日本を攻め取れなかったのか	70
25 鎌倉幕府はなぜ滅びたのか	72
<b>第2節 武家政権の変容と中世の社会</b>	
26 建武政権はなぜ崩壊したのか	74
27 室町幕府の政治はどのように推移したのか	76
28 元寇後の東アジアの交流はどのようなものか	78
<b>もっと知りたい日本史 5</b> 中世の随筆から読み解く社会と「唐物」	80
<b>地域の歴史 2</b> 古代・中世の蝦夷地とアイヌ	81
29 一揆はどのようにして生まれ、中世の自治を支えたのか	82
30 中世の産業は民衆生活をどのように豊かにしたのか	84
31 中世の商業・流通はどのようにうごいたのか	86
32 戦国時代はなぜはじまったのか	88
33 戦国大名の領国支配の国際的背景とは	90
34 14～16世紀の文化の特色は何か	92
<b>地域の歴史 3</b> 関東の戦国時代—後北条氏による関東統一への道—	94
<b>女性の歴史 2</b> 「戦う」女性たち	95

<b>第1章 近世への転換と歴史的環境</b>	
35 近世初頭の東アジア情勢はどのようなものか	98
36 信長と秀吉はどのようにして天下を統一したのか	100
37 秀吉の政治と対外政策はどのようなものか	102
38 信長・秀吉の時代の文化の特色は何か	104
<b>地域の歴史 4</b> 九州地方と東アジア海域世界	106
<b>もっと知りたい日本史 6</b> 秀吉の対外政策	107
<b>第2章 歴史資料と近世の展望</b>	108
<b>第3章 近世の国家・社会の展開と画期</b>	
<b>第1節 幕藩体制の成立と近世の社会</b>	
39 幕藩体制はどのようなものか	110
40 江戸時代の社会はどのようなものか	112
41 近世の国際関係はどのように形成されたのか	114
<b>地域の歴史 5</b> 近世の蝦夷地とアイヌの人々	116
<b>地域の歴史 6</b> 近世の琉球と奄美	117
42 江戸幕府の政治はどのように推移したのか	118
43 江戸時代の産業はどのように発展したのか	120
44 江戸時代の交通と都市はどのように発達したのか	122
45 儒学と学問はどのように展開したのか	124
46 江戸時代中期までの文化の特色は何か	126

もっと知りたい日本史 7	近世社会を構成したさまざまな人々	128
女性の歴史 3	江戸時代の遊女	129
<b>第2節 幕藩体制の動揺と社会の変化</b>		
47	吉宗はどのような政治をおこなったのか	130
48	村と町はどのように姿をかえていったのか	132
49	田沼の政治や寛政の改革は何をめざしたのか	134
50	外国船の接近は幕府にどのような影響をあたえたのか	136
51	幕府・諸藩はどのような改革をおこなったのか	138
52	近世後期の文化の特色は何か	140
53	近世後期の学問と思想はどのように発達したのか	142
もっと知りたい日本史 8	江戸時代の朝幕関係	144
地域の歴史 7	元禄大地震と大津波	145

第4編 近現代の地域・日本と世界

146

<b>第1章 近代への転換と歴史的環境</b>		
54	日本はなぜ開国したのか	148
55	開港は国内にどのような影響をあたえたのか	150
56	尊王攘夷運動はどのように展開したのか	152
57	江戸幕府はどのように滅びたのか	154
<b>第2章 歴史資料と近代の展望</b>		
<b>第3章 近現代の地域・日本と世界の画期と構造</b>		
<b>第1節 近代国家の形成</b>		
58	新政府はどのような国家をめざしたのか	158
59	明治政府はどのような経済政策を進めたのか	160
60	明治政府の宗教・文教政策はどのようなものだったのか	162
61	明治初期の対外関係はどのように変化したのか	164
地域の歴史 8	近代の蝦夷地・北海道	166
地域の歴史 9	近代の琉球・沖縄	167
62	欧米文化は社会にどのような影響をあたえたのか	168
63	自由民権運動はなぜはじめたのか	170
64	自由民権運動はなぜ衰退したのか	172
65	立憲体制はどのようにして確立したのか	174
66	条約改正はどのようにして達成されたのか	176
67	日清戦争前後の国内政治はどのようなものか	178
68	日清戦争はなぜおきたのか	180
69	日清戦争後の東アジア情勢はどのように推移したのか	182
70	日露戦争はどのような戦争だったのか	184
71	日露戦争後の東アジア情勢はどのように変化したのか	186
72	近代産業はどのように発展したのか	188
73	社会問題に政府はどのように対応したのか	190
74	明治の思想・教育・学問の特色は何か	192
75	明治文化の特色は何か	194
女性の歴史 4	製糸業と工女	196
もっと知りたい日本史 9	近代漫画の先駆者北沢楽天	197
<b>第2節 政党政治と大衆社会</b>		
76	政党政治はどのように発展したのか—明治から大正へ	198
77	第一次世界大戦に日本はどのようにかかわったのか	200
78	第一次世界大戦は日本にどのような影響をあたえたのか	202
79	第一次世界大戦後の日本外交はどのようなものか	204
80	大正デモクラシーとはどのようなものか	206
81	政党内閣制はどのようにして確立したのか	208
82	大正前後の文化の特徴は何か	210
女性の歴史 5	新しい女	212
地域の歴史 10	関東大震災	213

<b>第3節 第二次世界大戦と日本の社会</b>	
83 昭和初期の経済不況はどのようなものだったのか	214
84 昭和初期の外交はどのようなものだったのか	216
85 ファシズムはどのようにして台頭したのか	218
86 日本はなぜ国際連盟を脱退したのか	220
87 軍部はどのようにして台頭したのか	222
88 日中戦争の長期化のなかでつくられた戦時体制とは	224
89 第二次世界大戦は日本にどのような影響をあたえたのか	226
90 アジア太平洋戦争はどのように推移したのか	228
91 戦時下の国民生活はどのようなものだったのか	230
92 アジア太平洋戦争はどのようにして終結したのか	232
<b>地域の歴史 11</b> 都市への空襲と模擬原爆投下訓練	234
<b>もっと知りたい日本史 10</b> 戦時下の植民地と満州	235
<b>第4節 現代の日本と世界</b>	
93 占領政策はどのように進められたのか	236
94 占領下の経済と政治はどのように推移したのか	238
95 戦後の経済政策はどのように転換したのか	240
96 戦後の人々の暮らしはどのようなものか	242
<b>もっと知りたい日本史 11</b> アジアの解放	244
<b>地域の歴史 12</b> 復員と引揚げ—舞鶴港	245
97 冷戦は占領政策にどのような影響をあたえたのか	246
98 独立後の政治はどのように推移したのか	248
99 55年体制はなぜ成立したのか	250
100 独立後の日米関係はどのように変化したのか	252
<b>地域の歴史 13</b> 沖縄と基地	254
<b>女性の歴史 6</b> 女性のファッション	255
101 高度経済成長はなぜおきたのか	256
102 高度経済成長は社会にどのような影響をあたえたのか	258
103 55年体制下の政治はどのように推移したのか	260
104 1990年代の政治や経済におきた変化とは	262
105 日本はこれからどのような道を歩むのか	264
<b>もっと知りたい日本史 12</b> 『昭和天皇実録』にみる昭和天皇の幼少期	266
<b>もっと知りたい日本史 13</b> 戦後の文化	267
<b>第4章 近現代の歴史の画期</b>	268
<b>第5章 現代の日本の課題の探究</b>	270
歴代内閣総理大臣	278
年表	280
さくいん	292

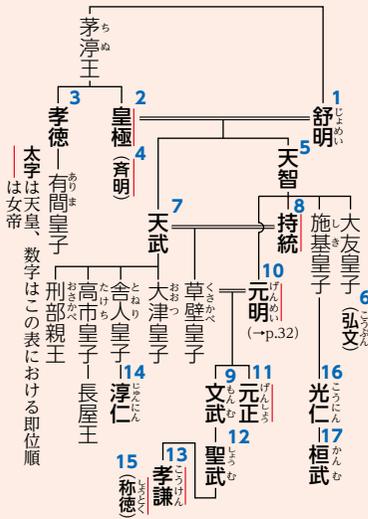


其の一に曰く、昔在の天皇等の立てたまへる子代の民、  
 処々の屯倉、及び別には臣・連・伴造・国造・村首  
 の所有所の部曲の民、処々の田莊を罷めよ。  
 其の二に曰く、初めて京師を修め、畿内・国司・郡司・  
 関塞・斥候・防人・駅馬・伝馬を置き、及び鈴契を  
 造り、山河を定めよ。  
 其の三に曰く、初めて籍・計帳・班田收授の法を造れ。  
 其の四に曰く、旧の賦役を罷めて、田の調を行へ。

（原漢文）

口語訳

一、昔から天皇が設置された子代の民や各地の屯倉（皇  
 室の私有民・私有地）、ことに臣・連・伴造・国造・  
 村首ら諸豪族のもっている部曲や各地の田莊（豪族の  
 私有民・私有地）は廃止せよ。  
 二、はじめて都の制をつくり、畿内・国司・郡司や関所・  
 斥候（北辺守備の人）・防人（西海防備の人）・駅馬・  
 伝馬をおき、駅鈴や関所の木契を造り、山河によつて  
 区画を定めよ。  
 三、はじめて戸籍・計帳・班田收授の法をつくれ。  
 四、今までの力役の税制をやめて、田にかける調の税制  
 を施行せよ。



▲1 皇室系図(1) 大友皇子は、明治時代に「弘文天皇」とされた。

8 律令国家はどのように形成されたのか

大化改新

618年に隋が滅び、628年に唐が中国大陸を再統一すると、唐は次々と周辺諸国を侵略していった。朝鮮半島の高句麗・百濟・新羅では危機感が強まり、640年代に政治権力の集中化をめざして政変があいついだ。

これは倭国にも波及し、643年に山背大兄王（厩戸皇子の子）が蘇我入鹿に滅ぼされ、645年には入鹿とその父蝦夷も中大兄皇子・中臣（のち藤原）鎌足らに倒された（乙巳の変）。皇極天皇は譲位し、弟の孝徳天皇が即位して新政権が発足すると、大化の年号を定め、都を飛鳥から難波に移した。翌646年正月、「改新の詔」を発して、部民や屯倉などを廃止し、公地公民をめざす施政方針を示した。その後、冠位制の2度の改定を通じて、官人をよりきめ細かく把握するとともに、巨大な難波長柄豊碕宮の造営をおこなった。これら孝徳朝の一連の政治改革を大化改新とよぶ。

百濟救援戦争

孝徳の死後、都は飛鳥にもどり、皇極が齊明天皇として再即位（重祚）した。齊明は飛鳥を大整備する一方、阿倍比羅夫を東北地方に派遣して支配地の拡大をめざした。

660年、百濟が唐・新羅の攻撃をうけて滅亡すると、百濟の復興をめざす鬼室福信らの要請をうけて、齊明は朝鮮半島へ救援軍を送ることを決意した。遠征先の九州で齊明は死去するが、中大兄皇子の主導で救援軍が派遣され、663年に白村江の戦いで大敗した。唐・新羅軍の侵攻に備えて、西日本各地の防備を固め、667年にはより内陸の近江大津宮に都が移された。

\*「改新の詔」の信憑性

『日本書紀』掲載の「改新の詔」は、大宝令（→p.30）の知識で書き直された部分がある。例えば、「国一郡一里」制がめざされているが、木簡によれば、「国一評一五十戸」制と考えられる。改変をどの程度とみるのか、大化改新の評価とかかわって議論がある。

1 中大兄皇子は皇太子、阿倍のうしろの倍内麻呂は左大臣、蘇我倉山田石川麻呂は右大臣、中臣鎌足は内臣となり、唐から帰った叟と高向玄理は政治顧問の国博士となった。

2 すでに孝徳朝に、日本海側の拠点として、淳足冊・磐舟冊（→p.38）がおかれていた。なお、阿倍比羅夫の派遣は、緊迫する東アジア情勢のなか、日本海経由で高句麗との連絡ルートを確認するねらいもあったとされる。



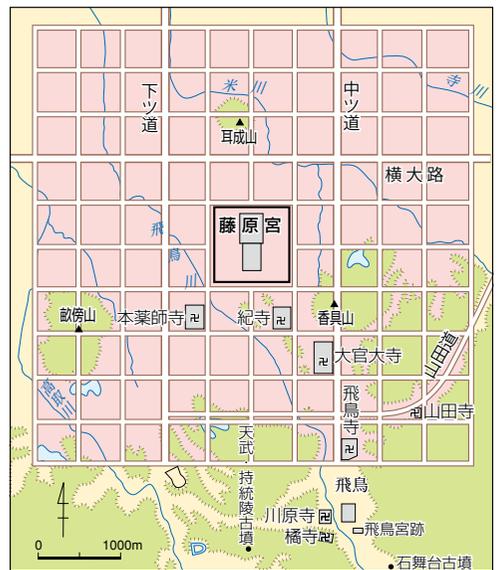
▲2 難波長柄豊碕宮の復元図 (大阪市教育委員会提供)

3 **水城と大野城** 水城は全長1km以上におよぶ。664年築。大野城は朝鮮式山城で、665年築。(九州歴史資料館提供)



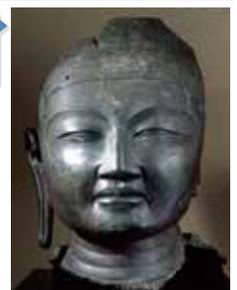
4 **水城・大野城の立地から何が読み取れるだろうか。**

4 **藤原京復元図** かつて藤原京は、横大路・中ツ道・下ツ道・山田道で囲まれた東西約2.1km、南北約3.2kmの範囲と考えられてきたが、現在は東西10坊、南北10条の約5.3km四方とする説が有力。藤原京は京域の中央に位置し、同時代の新羅の王京(慶州)と類似する。近年では、中国南朝の都であった建康城(現在の南京)の影響も指摘されている。



5 **なぜ山田寺の本尊が興福寺に残されているのだろうか。**

中大兄は、668年に7年間の称制をへて即位し(天智天皇), 670年には全国を対象とした初の戸籍(庚午年籍)をつくり、律令の制定をめざした。



6 **興福寺の仏頭** 蘇我倉山田石川麻呂の建立した山田寺の本尊。685年に開眼供養がおこなわれた。(奈良県、興福寺蔵)

7 **壬申の乱と天武・持統朝**

668年に高句麗が滅びると、唐との関係が悪化した新羅は、倭国に急速に歩み寄ってきた。

こうしたなか、672年、天智天皇の弟である大海皇子と、子である大友皇子との間で、皇位継承をめぐる内乱がおきた(壬申の乱)。これに勝利した大海人は、飛鳥浄御原宮で即位し(天武天皇)、天皇中心の中央集権国家の建設をめざした。その際、唐と国交が断絶していたこともあり、倭国に頻繁に使節を派遣してきた新羅や、百済・高句麗からの亡命者の知識をおもに活用した。681年、律令・歴史書の編纂を開始し、684年には八色の姓を制定して、豪族の身分序列を再編した。藤原京の建設にも着手し、倭国初となる銅銭(富本銭)を铸造した。

天武が死去すると、その皇后が称制し、689年に飛鳥浄御原令を施行した。翌690年に即位すると(持統天皇)、20年ぶりに戸籍(庚寅年籍)を作成し、694年には藤原京へ遷都した。藤原京は碁盤目状に区画した条坊制を備えた都城で、藤原宮の主要な建物には瓦が葺かれた。

8 **白鳳文化の形成**

7世紀後半から8世紀初頭にかけて、大化改新から藤原京の時代までの文化を、白鳳文化とよぶ。

中国の南北朝時代の文化の影響もなお残されていたが、一方で新たな唐初期の文化が取り入れられ、力強く清新な文化が形成された。大官大寺・薬師寺(本薬師寺)などの大規模な官寺が建設され、中央・地方の豪族たちの氏寺も多数造営された。仏像彫刻では興福寺の仏頭、絵画では法隆寺金堂壁画(1949年焼失)、高松塚古墳壁画、キトラ古墳壁画が代表的である。和歌や漢詩も盛んにつくられた。

9 **探 究しよう**

- 1 「改新の詔」の具体的な内容を整理してみよう。
- 2 なぜ何度も遷都がおこなわれたのか考えてみよう。
- 3 1世紀から7世紀までの東アジア情勢と倭国の国家形成との関係を考えてみよう。

## 平城宮木簡第1号

1961年、厳寒の平城宮跡の発掘現場で、古代のゴミ穴から約40点の木簡が見つかった。その中の平城宮木簡第1号（右下写真）はひとときわ目を引いた。現在、日本では飛鳥時代以後の40万点以上の木簡が出土しているが、これほどおもしろい木簡にはなかなかお目にかかれない。

これは、寺が小豆1斗、醬（醤油）1斗5升、酢、末醬（味噌）を請求するという内容。請求先はみえないが、一緒に出土した木簡や、「糞所」（糞はスープ）と書かれた土器もあわせて考えれば、宮廷全体の食膳を取り扱った大膳職と推定できる。

末尾には3月6日という日付があるが、年紀はみえない。木簡は紙にくらべて日常性が高く、すぐに用済みとなることもあって、年紀はしばしば省略された。幸いなことに、一緒に出土した木簡の中に、天平宝字5（761）年が1点、同6年が3点含まれており、第1号木簡もそのころのものと推定できる。

そして注目すべきは、「竹波命婦」である。『続日本紀』という奈良時代の正史には、常陸国筑波郡出身の采女（天皇や皇后などの身の回りの世話をする女官）である壬生小家主女が何度か登場する。彼女は称徳天皇の食膳を担当し、破格の出世もとげており、かなりのお気に入りであったらしい。

以上から注目されるのは、孝謙上皇（のちの称徳天皇）が天平宝字6年5月23日以降、平城宮に隣接する法華寺に居住していた、という事実である。この木簡の「寺」は法華寺とみてまちがいない。

## 奈良時代政治史の一断面

なぜ、孝謙上皇は法華寺にいたのか。それは、孝謙上皇が道鏡を寵愛するようになり、それを淳仁天皇がいさめ、仲たがいがいたからであった。さらに、孝謙上皇は五位以上の貴族を前にして、祭祀・小事は淳仁天皇がおこなうが、国家の大事・賞罰は自分がおこなうと宣言した。淳仁天皇を擁立した恵美押勝（藤原仲麻呂）も徐々に追いこまれ、天平宝字8年9月11日

に反乱をおこし、同月18日に敗死してしまう。

(→ p.33)

つまり、平城宮木簡第1号は、天平宝字7年ないし同8年の3月6日に、法華寺に居住していた孝謙上皇が、筑波命婦を介して、平城宮内の大膳職に対して、食材・調味料を請求した木簡である、と考えることができる。『続日本紀』をひもとくことにより、当時の緊迫した政治情勢のなかで、この木簡が作成されたようすが浮かびあがってくるわけである。

恵美押勝の乱の緒戦は、皇権の象徴ともいえる駅鈴（駅馬の利用証）・内印（天皇御璽）の掌握をめぐる争われた。その影響であろうか、奈良時代末の衛府関係の木簡群の中に、午後9時から午前5時まで、2時間交代で兵士が駅鈴を守ったことを記した木簡が見ついている。

また、恵美押勝の乱では、大がかりな処罰がおこなわれたことが知られる。実際、人事をつかさどる式部省の役所跡から出土した木簡の削屑の中にも、仲麻呂派であることを理由に免職の扱いをうけたことを生々しく伝えるものがある。

ごくありふれた日常を記す木簡であるが、時に政治史の一コマを垣間見せてくれるのである。

▶ 平城宮木簡第1号 少し文字が欠けているのは、用済みになった際、意図的に割ったことによる。宛先を記さないのは、当事者にとって自明であったため。

◀ 「仲麻呂支儻」（仲麻呂派）の免職を示す木簡



□不弟申送省判依仲麻呂支儻除□

（表）寺請 小豆一斗 醬一斗五升 酢 末醬等  
（裏）右四種物竹波命婦御所 三月六日



(写真はいずれも奈良文化財研究所提供)

## 第2編

# 中世の日本と世界



中世とは、宋元時代の中国の経済・文化の影響を受けながら、古代に生まれた「日本」が列島に根づいていく時代であった。蒙古襲来を例外として本格的な対外戦争のない中世の国家は、「小さな政府」となり、戸籍や土地台帳をつくって人や土地を管理・保護することはなかった。自分の身（権利）は自分で守るという自力救済の風潮が広がり、紛争や自然災害が恒常化すると、武士が台頭して国家の軍事力をになうようになるとともに、祈りのにない手として寺社が社会的・文化的に大きな役割をはたした。支配者層は公家（貴族）、寺社勢力や武家（幕府）に分裂し、そのもとで地域社会も成長したが、それらを統合するのが荘園制というシステムであった。



## 12世紀の東アジア



遼の支配下にあった女真族は、12世紀はじめに金を建国すると遼を滅ぼし、ついで宋を攻めた。宋は1127年に長江流域にのがれたが(南宋)、国内では流通・経済が発達し、開発が進んで各種産業も発展した。唐の衰退後、日本の支配者層は孤立主義をとり、朝貢は衰えたが、民間の海上交易が盛んになり、日本でも平氏が日宋貿易を推進した。

13世紀、モンゴルのチンギス=ハンとその子孫たちは、ユーラシア大陸の広大な地域を征服して巨大な帝国を築いた。東部ユーラシアでは金を滅ぼしたのち、高麗を服属させ、日本や東南アジアにも侵攻した。帝国は元朝を含めて大きく四つの国にわかれ、ゆるやかに結合していた。そのもとで陸と海の交易路が結ばれ、ユーラシアの交易は空前の活況を呈した。

## 13世紀のユーラシア

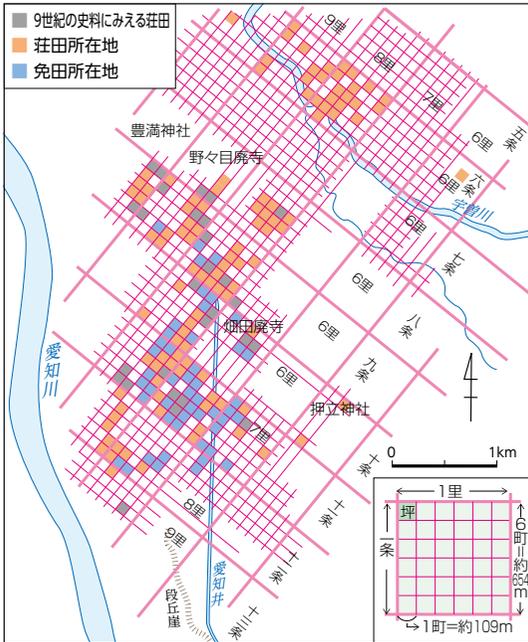


厳島神社 (広島県廿日市市)

モンゴル帝国は、14世紀半ばから解体がはじまり、東アジアでは新たに成立した明朝が元朝を北へ追いやった。明朝は朝貢制度をととのえ、高麗にかわった朝鮮王朝や、琉球王国、日本の室町幕府将軍などと朝貢・冊封にもとづく関係を結んだ。また、インド洋沿岸地域にも使者を派遣して朝貢をうながした。一方、朝貢によらない貿易を求めた商人の中には武装して海賊行為をする者(倭寇)もあらわれ、東アジア諸国はその鎮圧に苦心した。

## 15世紀のアジア





◀ 1 元興寺領近江国（滋賀県）愛智荘の復元図（『荘園を読む・歩く』より）免田（太政官や国司の認定によって官物や臨時雑役が免除された田）がとびとびに存在している。これらの免田の官物や臨時雑役に相当する額（その一部の場合も多い）は、公家や寺社などの荘園領主の収入となる。荘園領主は、律令に規定された収入に相当するものとして、太政官や国司によって承認された荘園からの収入を受け取った。復元図の土地区画は条里地割で、6町四方で区切り、それぞれ1町四方に細分する。1町四方の区画はさらに10等分された。これらの水田区画の多くは古代までさかのぼり、班田収授に便宜をあたえる役割をはたした。

▶ 3 紀伊国（和歌山県）棒田荘絵図 もとは崇徳上皇領の荘園で、保元の乱ののちに後白河天皇（→p.56）に引き継がれ、連華王院領をへて、1183年には神護寺に寄進され、翌年に荘園として設立する手続きがおこなわれた。この絵図は、約40年後の1223年前後に隣接する荘園との間で、絵図に描かれている静川の水の利用をめぐる激しい争論に際して作成されたとしてされている（異説もある）。絵図中には勝示（荘園の境界を示す目印）が黒い点で示され、その内部に、鎮守である八幡宮や水田、家、山がひとまとまりになっていることが読み取れる。（京都市、神護寺蔵）

年貢	名田を単位に課税。 ふつうは米で納め、年貢率は収穫のほぼ3割～5割。
公事	荘園内の特産物・手工業製品を納める。
夫役	領主の佃（直営地）の耕作や年貢・公事の運搬、館の整備や土木工事などの雑役に人夫として徴発される労働課役。

▶ 2 農民の負担

## \*負名体制

国司は、律令に定められた諸税のかわりとなる租税を収納するために、国内の土地を名に編成し、田堵とよばれる有力農民に名の経営を認め、その一方で租税納入の責任を負わせた。そうした田堵のことを負名といい、税の納入を田堵に請け負わせる体制は**負名体制**とよばれた。

1 免除された租税に相当するものが、荘園領主の収入となった。

2 国司が特定の土地の租税を免除する権限を使って不輸の権を得た荘園。代々の国司ごとに認定をうける手続きをとった。

3 11世紀に著されたとされる『新猿楽記』には、架空の人物ではあるが、大名田堵の実例として田中豊益という人物の農業経営が描かれている。

## 16 中世社会はどのようにして成立したのか

### 古代荘園から中世荘園へ

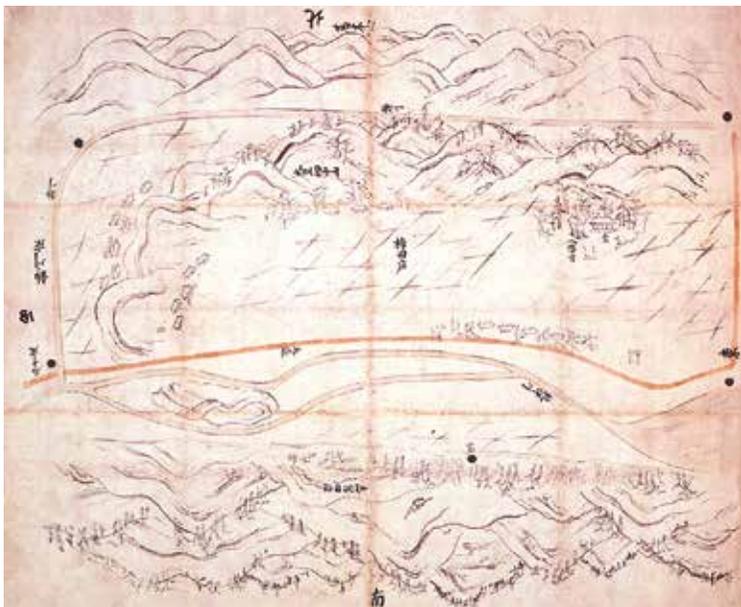
8世紀に成立した初期荘園（古代荘園）は、班田制度の崩壊とともに、10世紀には経営が不安定

化したが、一部は荘園領主の政治的立場をもとに、太政官符・民部省符により租税を免除される**不輸の権**を得て（**官省符荘**）、さらに国司が派遣する検田使の立ち入りを拒否できる**不入の権**も獲得した。また、国司が免判を発行して租税の免除を認めることもあった（**国免荘**）が、これは国司の交代によって収公されることも多く、荘園領主と国司の間でしばしば紛争の原因となった。

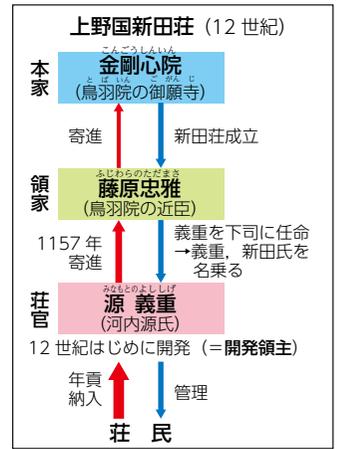
10世紀以降、朝廷が地方政治や課税の方針を転換したことにもない、規模の大きな**名**の経営を請け負って勢力をたくわえた、「**大名田堵**」ともよばれる有力な農民があらわれた。

11世紀になると、盛んに墾田を開発し大規模な農業経営をおこなう、**開発領主**とよばれる層があらわれた。開発領主の一部は、国司による収公をのがれるために、年貢の収納や土地の管理などの**権益**をもつ**荘官**（**預所**・**下司**・**公文**など）となることを条件に、開発した墾田を**権力**をもつ中央の貴族・寺社に寄進した（**寄進地系荘園**）。

開発領主より荘園の寄進をうけた貴族・寺社は**領家**とよばれた。11



❓ 図1と図3を見比べて、両者にどのような違いがあるかまとめよう。



▲4 荘園の寄進 (概念図) 上野国(群馬県) 新田荘の例。

世紀後半になると、領家が荘園の権利をより安定させるため、さらに上級の貴族(権門勢家)や寺社に寄進する場合もあり、その寄進先は本家とよばれた。

**領域型荘園と寺社の役割**

11世紀前半までの荘園は、官省符や国司の免判によって租税を免除された土地(免田)の集合体にすぎず、それらの土地の耕作者は、公領の田堵であった。また、各国とも公領にくらべて荘園の比率は低かった。

11世紀後半以降、荘園のあり方は変化し、田畠だけではなく山野河川を含む領域型荘園が広く出現し、その荘園内部に新しい村落が形成されるようになる。一方で、国司は墾田の一部を公領(国衙領)に組み入れ、国内の公領を律令制のもとでの郡・郷から、開発領主の経営する領域にもとづき新たに郡・郷・保などの単位に再編成して、開発領主たちを郷司・保司に任命して徴税を請け負わせた。この変化のなかで、朝廷は荘園・公領を問わず、国司による臨時的徴税賦課(一国平均役)を確保しようと荘園整理令を発した。税目も官物・臨時雑役から年貢・公事・夫役といったものにかわっていった。

こうして、律令制で設定された「国」のもとで、律令制の郡一郷にかわって、荘園と公領が中世の地域社会の基本単位となった(荘園公領制)。領域をもつ荘園の間ではしばしば境界紛争が生じ、その解決には武力が必要とされ、武士が荘園に権益をもったり、荘官となるきっかけとともに、現地の側でも荘園領主による調停を必要とした。荘園現地には中央の有力寺社の末寺末社が設置され、地域の中心となった。荘園公領制は、変質しながら16世紀の太閤検地まで続くことになる。

**\*「寄進地系荘園」「免田型荘園」「領域型荘園」**

摂関期の荘園も中世の荘園もどちらも寄進によって成立しており、この点に着目して「寄進地系荘園」とよばれてきた。しかし、近年の研究では、両者の現地のあり方が大きく異なっていることから、前者を「免田型荘園」、後者を「領域型荘園」と区別することが一般的である。

- 4 開発領主には、都からやってきて土着した中下級貴族(武士など)や僧侶が多い。
- 5 この再編成により、律令制下での郡と中世の「郡」は性格が異なるものとなった。公領といっても、知行国主や在庁官人の私領化していった。

**探 究しよう**

- ❶ 10世紀以降、地方でおこった開発のうごきを説明してみよう。
- ❷ 荘園の租税が免除される仕組みを説明してみよう。
- ❸ 荘園の租税を免除したことに対して、朝廷はどのようなことをおこなったか、説明してみよう。



## 中国大陸における硫黄の需要

こんにち、化石燃料の燃焼から発生する硫酸化合物は、酸性雨などの主要原因物質として、地球環境全体への悪影響が心配されている。しかし、かつては、火山国である日本列島産の硫黄は11～16世紀の東部ユーラシア（東アジア・中央アジア東部・東南アジアを含む地域）の歴史のなかで重要な役割をはたしてきたことが、近年の研究で注目されている。

中国大陸では、宋（960～1126 北宋、1127～1279 南宋）の建国にもかかわらず、遼（契丹）や金（女真）、あるいは西北辺の西夏（タングート）など東アジア諸民族の軍事的対立が長く続くことになった。また、宋は軍事的緊張に備えて財源を確保するため、海外交易に力を入れ、海商たちの活動を奨励し、輸入品に課税した。そして戦いを有利に進めるため、火器を実戦に投入した。この火器に使われた火薬（黒色火薬）は、硝石・木炭・硫黄（自然硫黄）の絶妙な配合が不可欠であり、硝石と木炭は中国大陸でも調達できたが、硫黄の産地は宋の領域にはなかった。そこで、宋は、10世紀末より周辺の火山国である日本列島、あるいは遠く西アジアや中央アジア、同じく火山国であるインドネシアのジャワ島（イジェン山など）からもたらされる硫黄を、好んで受け入れたのである。

## 中世日本の硫黄を追って

では、日本列島はこれにどのような役割をはたしたのだろうか。もっとも有力視されているのは「鬼界が嶋」「貴賀が嶋」などとも表記される、現在の鹿児島県鹿児島郡三島村の硫黄島（薩摩硫黄島）で採掘された硫黄が、大宰府・博多を経由し、宋の海商たちによって中国大陸へ輸出されていたという説である。

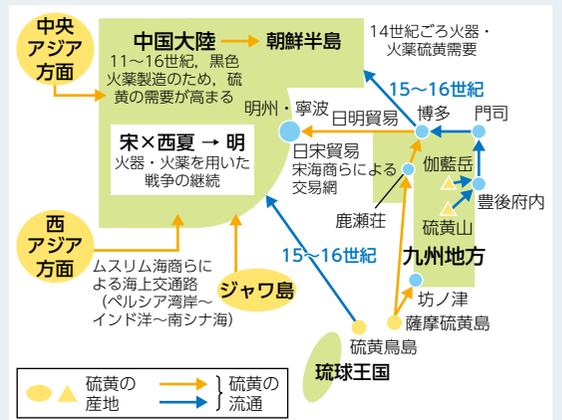
11世紀半ばに成立した『新猿楽記』では、「八郎真人」という商人の商圏は「貴賀が嶋」にもおよび、彼の扱う商品のうち「本朝」（日本）の産物として「硫黄」があがる。また、『平家物語』巻2「有王」「僧都死去」の段には、「九国の商人」が島に通い、島の山頂付近で採掘された硫黄を買い取っていた記述があ

る。その通ルートは主として九州西部から、大宰府・博多方面にのびていたことが推定されている。11世紀末には、宋が西夏との戦いを背景に、日本産硫黄を大量に買いつけたことが明らかになってきた。つまり、10世紀末から13世紀にかけて、宋の海商たちは、大宰府・博多に中国産の書籍・医薬品・銅銭などをもち、大量の硫黄や木材（造船材・棺桶材・仏寺の建材）をその帰り荷としたのである。

日本産硫黄の輸出は、14～16世紀も変容しながら続いた。ユーラシアの広い地域を支配したモンゴル帝国の統治が続いたため、火器・火薬が世界に広がったうえに、14世紀末には明から高麗・朝鮮王朝に火薬や火砲が伝わったため、朝鮮半島域での需要も増していった。これに対し、九州東部、ことに大分県にある九重連山の硫黄山や伽藍岳を産地として、大友氏や大内氏が統治した博多から対馬の宗氏などの手をへて、朝鮮半島に輸出されるルートも確立された。

一方、増える中国大陸での需要にこたえたのは、明と冊封を結んだ琉球王国の硫黄島（現在の沖縄県島尻郡久米島町）で産出された硫黄と推定されている。琉球王国成立以前の三山でも硫黄は冊封を得る朝貢品として重視され、多いときには4隻の船に7万斤（約42トン）を積載したという。このように日本列島は、硫黄の輸出を通じて東部ユーラシアの歴史の動向と深いかわりをもっていたのである。

▼ 硫黄の交易ルート（概念図） 15～16世紀、海商たちは中国大陸と朝鮮半島への輸出でたがいの権益をおかさないう、一種の「すみわけ」をおこなっていたと考えられる。





▲1 信玄堤 甲斐国を領した武田信玄が釜無川の氾濫から耕地を守るためにつくらせた堤防。支流を二つに分けて流れをかえ、支流がぶつかる釜無川の本土手に堤防（本土手）を築いた。本土手には竹を植え、さらに本土手の前につき出しという石積みをつくり、本土手を守る工夫をした。

一 喧嘩の事、是非に及ばず成敗を加ふべし。  
 (信玄家法)、原漢文)

一 駿遠両国之輩或はわたくしとして他国より、よめをとり、或はむこにとり、むすめをつかはす事、自今已後之を停止ししめぬ。(今川仮名目録)

一 当家壘館の外、必ず国中に城郭を構させらる間敷候。総て大身の輩をバ悉く一乗の谷へ引越しめて、其郷其村にハ、只代官・下司のみ可被一居置事。(朝倉敏景十七箇条)

【語訳】  
 一、私的な喧嘩については、その理由を問わず処罰する。  
 一、駿河・遠江両国の家臣は、私的に他国から嫁をむかえ、あるいは婿をとり、嫁に出すことを今後は禁止する。  
 一、当朝倉家の城以外、決して領国内に城郭を構築させないようにすること。すべて上級武士は一乗谷に引越しさせて、そのあと郷村支配のために代官・下司をおくこと。

### 33 戦国大名の領国支配の国際的背景とは

#### 戦国大名の支配

応仁・文明の乱のころの守護・守護代、それに準

じる領主は、室町幕府の統治機構からの自立をめ

ざし、国や郡など一定の地域に対して独自の支配権を確立しようとした。その地域に住む国人・地侍などを中小領主として認めたくえで、彼ら  
 を家臣団として編制した。支配下の領地では検地をおこない、段銭・棟  
 別銭・夫役などを課した。こうして、土地と民衆を直接支配する「公  
 儀」＝公権力の地位を得ていった。これらの大名を戦国大名という。

戦国大名には、守護から成長した者、国人や守護代から実力で守護の  
 権限を奪った者などがある。彼らの多くは、数郡から数か国にわたる広  
 い領域を一元的に分国（大名領国）として支配した。分国支配では、明  
 文化した分国法を定め、その規範とした者もいた。分国法のおもな内容  
 には、大名による家臣の統制、家臣どうしの争いの裁定、縁座などの連  
 帯責任制をもとにする民衆支配の原則などがもりこまれた。分国法は在  
 地の慣習法を吸収したのも多く、大名の権力が公的な統治をまだ十分  
 に成熟させていなかった。分国法をもたずに大名の当主による裁定や慣  
 習法による施策で分国の経営にあたることも多かった。

また、戦国大名は分国の富強をはかるために、強い武力を背景に権門  
 の権威を否定した。交通や流通をさまたげてきた関所を廃止し、築市令  
 などを発布して商工業者を城下町に集め、商品流通に課税し財源を確保  
 することに努めた。

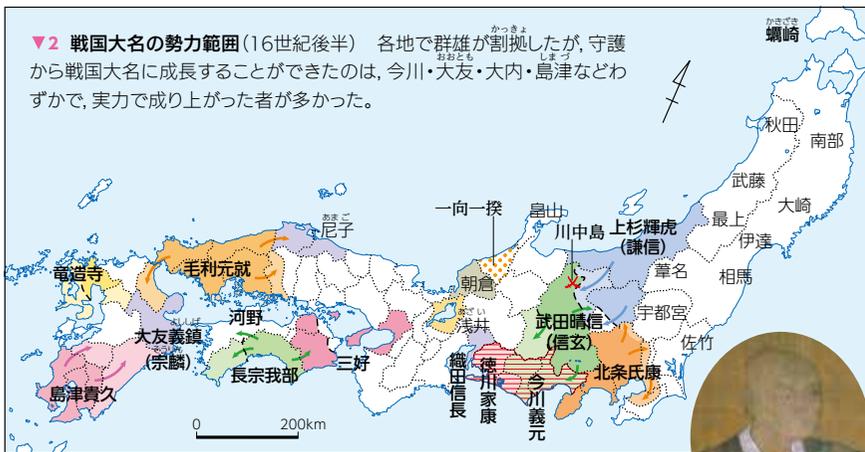
さらに、治水・灌漑技術、築城技術、鉦山の採掘技術の飛躍的發展を  
 うけて、戦国大名は分国支配と戦時への備えの両面からこれらの技術を  
 重んじた。とくに、石見・大森銀山（石見銀山）では、16世紀はじめ

#### \*分国法と公権力

分国法には、紛争の当事者が相手を「私刑」(リンチ)に処するのも当然とすること(当事者主義)や、公的な権力が公平な立場から明確な証拠によって紛争の是非を正すのではなく、「静謐」(秩序が保たれている状態)を破って紛争をおこしたことを問題にして双方を罰するといった「喧嘩両成敗」の原理など、在地の慣習を吸収したものが多。その点で大名の権力が公的な統治をまだ十分に成熟させていなかったと考えられる。なお、公儀として統治が安定した江戸幕府では、喧嘩両成敗は公的な原理とはされてない。

1 大名の家臣間で血縁関係に擬した寄親・寄子制とよぶ主従関係を結んだ。

2 分国法の一つ「今川仮名目録追加」第20条の「只今は、をしなべて自分の力量を以て国の法度をも申付け」との文言は、室町幕府法からの独立を志向した戦国大名の統治意識を表現している。



▼2 戦国大名の勢力範囲(16世紀後半) 各地で群雄が割拠したが、守護から戦国大名に成長することができたのは、今川・大友・大内・島津などわずかで、実力で成り上がった者が多かった。

**中国地方** 7か国の守護であった大内氏が1551年に重臣陶晴賢(1521~55)に倒され、陶氏もその4年後に安芸の国人**毛利元就**(1497~1571)に滅ぼされた。

**九州地方** 伝統的な勢力である薩摩の**島津氏**、豊後の**大友氏**のほかにも**竜造寺氏**が台頭。

**四国地方** 国人出身の**長宗我部氏**が台頭。

ころ、朝鮮から「灰吹法」とよばれる銀精錬技術が伝えられると、大量の銀生産がはじまった。

### 戦国大名とアジアの動向

石見銀山産の銀は純度が高く、日本列島を訪れるようになったヨーロッパ人によっても「ソーマ銀」として高く評価され、アジア貿易の決済手段として、広く中国大陸へもちこまれた。15世紀後半から16世紀にかけて、明では銅資源が枯渇して銅銭の質が下落し、主たる支払い手段が銀や紙幣にかわった。また、日明貿易が衰え、倭寇の密輸ルートも明に抑圧された。

こうした東アジア世界の変化をうけて、日本では、**洪武通宝**や**永楽通宝**などの渡来銭の供給量では、流通経済の需要を満たせなくなった。このため、市場では、粗悪銭(割銭・私鑄銭、鏹銭)などの受け取り拒否(撰銭)が頻繁におこり、流通に混乱をきたすことが多くなった。戦国大名や幕府は、くり返し**撰銭令**を出して粗悪銭と良銭との交換比率を定め、条件つきで流通させようとしたが、あまり効果はなかった。

その結果、流通経済の発達していた西日本一帯では、銭による決済はしだいに姿を消し、米による決済に移行した。戦国大名にとって兵糧米の確保は絶対必要だったうえに、米が物品貨幣の役目を果たしていたからである。そして、税負担や軍事動員の基準も、銭を基準にする**貫高制**から米を基準にする**石高制**にかわった。一方、経済的に後進地域であった東日本では、永楽通宝をもととする貫高制が続いていた。こうした日本列島の流通や生産表示方法に関する東と西の違いも、東アジア世界と深くかかわる貨幣量の絶対的不足に起因していたのである。

**東北地方** 地頭出身の**伊達氏**が台頭。

**関東地方** **伊勢宗瑞**(のちの北条早雲)の子**氏綱**(1487~1541)が**武威**・**安房**をおさえ、**孫氏康**(1515~71)が**古河公方**を破って関東一円に勢力をはった(→p.94)。

**中部地方** 守護代出身の**長尾景虎**(のちの上杉謙信, 1530~78)が越後をおさえ、甲斐を根拠に信濃へと勢力を拡大した**武田晴信**(信玄, 1521~73)と**川中島**(長野市)で何度も激突した。また、駿河では**今川義元**が勢力をのびし、美濃では**斎藤道三**(?~1556)が守護土岐氏を倒して勢いを強めた。



▲3 **北条早雲** 幕府奉公衆**伊勢氏**の一族の出身。(神奈川県, 早雲寺蔵)



▶4 **石見銀山** 16世紀に本格的な開発がはじまった。写真は坑道の入口。(島根県大田市)

3 市場税や営業税を免除したり、座の独占販売などの特権を廃して、自由な商業活動を認めた法令。

4 その技術は、**但馬国**(兵庫県)生野銀山、**佐渡国**(新潟県)鶴子銀山、**甲斐国**黒川金山にも伝えられて鉱産の増大につながった。

5 石見銀山の中心**大森地区**の中世・近世の地名「**さま**」、あるいは「**佐摩村**」にもとづくよび方。

6 **大内氏**が1485(文明17)年にはじめて出し、幕府も1500(明応9)年に出した。

### 探究しよう

- 1 戦国大名の分国統治にはどのような共通点と相違点があるか考えてみよう。
- 2 戦国時代の経済や社会は日本列島を取り巻く国際環境とどのような関係にあったのかを考えてみよう。
- 3 戦国大名の分国統治の特色と国際環境の変化を模式図にしてみよう。

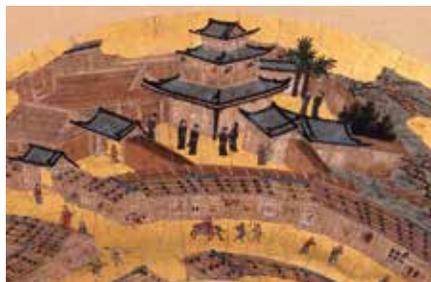


▲1 南蛮船の入港（「南蛮屏風」, 国立歴史民俗博物館蔵）

1 背景には寧波の乱や遣明船の途絶、倭寇の活動などがある（→p.79）。

2 1543年との説もある。

3 プロテスタント（新教）に対抗して、カトリック（旧教）の発展と布教のために、スペイン人のザビエルやイグナティウス＝ロヨラ（1491～1556）らが結成。



◀2 南蛮寺 京都にあった南蛮寺（教会や修道院など）を描いたもの。寺内には宣教師がいる。寺の外では見世棚で土産品が売られている。（「京都南蛮堂図扇面」, 神戸市立博物館蔵）

### 35 近世初頭の東アジア情勢はどのようなものか

#### ヨーロッパ勢力の登場

15世紀後半から16世紀にかけて、ヨーロッパ諸国は、彼らにとって未知の世界に乗り出した。

その先頭に立ったのがスペインとポルトガルである。スペインは西をめざし、中南米大陸の大部分を植民地とした。さらに太平洋に進出し、フィリピン諸島の植民地化を進め、1565年にマニラ・メキシコ間に太平洋横断航路を開いた。ポルトガルは、南米の航海領域に植民地（現在のブラジル）を建設したほか、アフリカ以東に進出した。1511年にはマラッカを占領し、ついで明に貿易を求めたが許されなかった。

#### 鉄砲・キリスト教の伝来と後期倭寇

そのころ、中国で銀の需要が高まる一方、日本では、銀生産が急増し、中国産の生糸や絹織物・陶磁器などへの需要が高まり、日中間の貿易が求められるようになった。しかし明の朝貢貿易体制は機能しなくなっており、中国系の人々（華人）を中心とする民間の密貿易がこの地域の交流をになうようになった。明に貿易を拒否されたポルトガルもこれに参加した。1540年代から銀を求めて多数の中国船が日本に來航するようになり、鉄砲やキリスト教もこのルートから伝来した。

1542年、種子島に中国船が漂着し、領主種子島時堯は乗船していたポルトガル人から2挺の鉄砲を購入し、家臣にその用法と製法を学ばせた。その技術は和泉の

種子島に中国船が漂着し、領主種子島時堯は乗船していたポルトガル人から2挺の鉄砲を購入し、家臣にその用法と製法を学ばせた。その技術は和泉の

#### ▼4 鉄砲（種子島時邦氏所有）



#### \*倭寇の頭領王直

鉄砲を種子島に伝えた船の船長は、中国の商人王直（？～1559）である。王直は、中国と日本や東南アジア方面を結ぶ海上の密貿易をおこなうなかで、当時アジアに進出していたポルトガル人とも交流があったと考えられる。そののち、王直は明政府のきびしい取り締まりを避けて五島や平戸に移ると、倭寇の頭領として海上に一大勢力を築いた。拠点となった平戸は、貿易でにぎわうようになった。

#### ▼3 鉄砲をもつ足輕

銃の筒先から火薬と弾をつめる先込め式で、なれると15秒間に1発ぐらいの速さで撃てた。（『雑兵物語』, 東京国立博物館蔵）



第1節

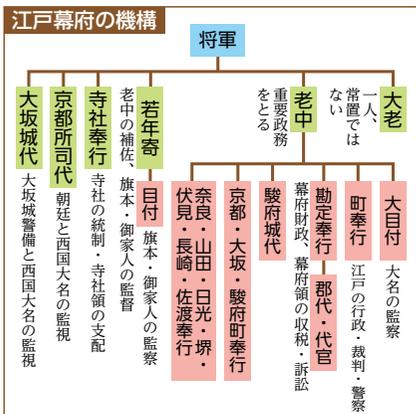
幕藩体制の成立と近世の社会

幕藩体制が長期にわたって維持されたのはなぜか



▲2 徳川家康 三河岡崎城主の子として生まれた。1590年の秀吉の小田原攻めのあと、関東に移封された。(日光東照宮宝物館蔵)

1 大名のうち、徳川氏一族を親藩といい、とくに家康の子が大名となった尾張・紀伊・水戸の徳川家は御三家という。おもに関ヶ原の戦い以前から家康に仕えていた大名を譜代、関ヶ原の戦い前後に徳川氏に従った大名を外様という。



徳川 御三家  
氏名 5万石以上の家門および譜代大名  
氏名 5万石以上の外様大名  
大文字は20万石以上  
★は5万石以下の大名  
幕府直轄領(主要なもの)

▼1 大名配置図 1664(寛文4)年。外様大名は、江戸から離れた所に配置された。幕府は江戸・大坂・京都の三都や政治・経済上の重要地、佐渡金山、石見・生野銀山、足尾銅山などの主要鉱山も直轄地とした。なお直轄領は、関東・近畿・東海地方に多いが、他領と入り組み、複雑なので表示できない。

39 幕藩体制はどのようなものか

江戸幕府の成立

1598年の豊臣秀吉の死後、五大老筆頭の徳川家康が勢力を拡大し、五奉行の一人石田三成と対立を深めた。そして、1600年、両者は美濃の関ヶ原で激突し、家康が勝利した(関ヶ原の戦い)。1603年、家康は征夷大将軍となり、江戸幕府を開いたが、2年で將軍職を子の秀忠にゆずり、將軍職を徳川氏が世襲することを示し、自らは大御所として駿府で政治の実権をにぎった。この江戸幕府開設から明治維新までの約260年間を江戸時代という。

家康は1614年には大坂城を攻め、翌年、秀吉の子秀頼を自害させ、豊臣氏を攻め滅ぼした(大坂冬の陣、夏の陣)。家康は1616年に死去したが、2代秀忠、3代家光の時代に政権の支配体制が固められた。

大名の統制

大名が領地を支配する組織を藩とよび、統一政権としての將軍(幕府)と大名によって全国の土地と人民を支配する仕組みを幕藩体制という。將軍の軍事力としては、直属の家臣である旗本・御家人がおり、江戸に居住して幕府の軍事・行政を担当した。幕府の支配地は、直轄領(天領)と旗本領をあわせると全国総石高の4分の1近くを占めた。

1615年、大坂の陣の直後、幕府は大名を統制するために、一国一城令を出して、大名の居城を領内1か所だけに限った。さらに武家諸法度を制定し、大名が守るべきことがらを定めた。

▶3 宗門人別改帳 村・町ごとにつくられ、その檀家の家族や奉公人までもが記載され、戸籍の役割をはたした。



武家諸法度は、将軍の代替わりごとに出された。

3代将軍家光のときには**参勤交代**が義務づけられ、大名は1年おきに国元と江戸の間を往復することになった。

### 江戸幕府の組織

江戸幕府の中央組織では、まず**老中**が、将軍のもつと重要政務を取り扱った。**若年寄**は、老中を補

佐するとともに旗本・御家人に関する政務を取り扱った。**大目付**は大名を監察し、**目付**は旗本・御家人を監察した。このほか、寺社奉行・町奉行・勘定奉行の**三奉行**がおかれ、**寺社奉行**は寺院・神社の統制と寺社領の支配、**町奉行**は江戸の市政、**勘定奉行**は幕府財政と直轄領の支配を担当した。また、これら三奉行や他の管轄にまたがる事項についての合議機関として**評定所**があった。

地方では、朝廷と西国大名の監視をおこなうために**京都所司代**や**大坂城代**などをおき、**堺**・**長崎**・**佐渡**・**奈良**などの重要な地域にはそれぞれ**遠国奉行**をおいた。また全国の直轄領には**郡代**・**代官**をおいた。

### 朝廷と寺社の統制

朝廷に対しては、1615年に**禁中並公家諸法度**を制定し、天皇の行動に規制を加えた。また、幕府と天皇の取次役の公家として**武家伝奏**を設け、京都所司代と連携しながら朝廷を監視した。1629年におこった**紫衣事件**をきっかけに、幕府は朝廷への監視制度をさらに整備した。

寺院に対しては、1665年、各宗派に**諸宗寺院法度**を出して、寺院を本山から末寺にいたるまで組織させた(**本末制度**)。人々はいずれかの寺院に属し、17世紀後半ころには葬儀を通じた寺院(檀那寺)と信徒の家(檀家)との間の半永久的な関係が定着した。また、キリスト教を取り締まる必要から**宗門改め**を実施し、幕府禁制の宗教の信徒でないことを証明するための**宗門人別改帳**(**宗門人別帳**・**宗旨人別帳**)を村・町ごとにつくらせた。こうした仕組みを**寺請**(**寺檀**)**制度**という。神社に対しても1665年に**諸社禰宜神主法度**を出して統制を加えた。

## 史料 武家諸法度 (寛永令「別本諸法度」一部抜粋)

一、大名・小名、在江戸の交替、相定むる所なり、毎歳夏四月中参勤致すべし、従者の員数、近来甚だ多し、且は国郡の費、且は人民の勞なり、向後其相応を以て之を減少すべし、…

▲金地院崇伝が起草し、2代将軍秀忠が発布したのが最初で元和令とよばれる(→p.108)。その後3代将軍家光が条文を加え寛永令として発し、5代将軍綱吉は諸士法度と統合して天和令を制定した。

2 直属家臣で1万石未満の者を直参といい、そのうち将軍に謁見できる者が旗本、できない者が御家人である。

3 幕府の役職には原則的に譜代大名と旗本が就任した。ほとんどの役職が2名以上の定員で、重要事項は合議で決定した。

4 1627(寛永4)年、後水尾天皇(在1596~1680)が幕府の許可なく高僧に紫衣の着用を認めたことは、禁中並公家諸法度に違反するとして、幕府が勅許を無効にした事件で、幕府の法度が天皇の勅許にも優先することを示した。

### 探 究しよう

- 江戸幕府が大名や朝廷・寺社をどのように統制したのか説明してみよう。
- 以前の時代の政権とくらべて江戸幕府の組織にどのような特徴があるか考えてみよう。
- 身近な地域が江戸幕府とどのような関係におかれていたのか調べてみよう。

「古琉球」から「琉球口」へ

近世の琉球は1609（慶長14）年の島津氏（薩摩藩）の軍事的征服からはじまる。幕府は島津氏の琉球領有と支配を認めたが、中世以来、明の朝貢国であった琉球王国は存続させた。薩摩藩は琉球全土を検地し、藩主は国王尚寧に領地を安堵する文書をあたえ、日本型の封建的主従関係のもとにおいた。琉球から薩摩に派遣する年頭使が1613（慶長18）年にはじまって定例となり、1624（寛永元）年に「道之島」（奄美3島）を蔵入地とした。1631（寛永8）年には那覇に在番奉行をおき、国王の代替わりや行政・中国関係や海防まで管理・統制し、キリスト教や日本風の鬘・髪・衣装などを禁止した。日本と琉球の間のヒト・モノの往来は、薩摩藩の管理下におかれ、渡航・居住は薩摩藩の役人が船頭・水主（水夫）などに限られた。

その一方で幕府は、1620年代に明との講和交渉に見切りをつけ、中国との関係は、「通信」（国交）を避け、「通商」（民間の貿易）だけを維持するという方針に転換した。島津氏の琉球征服で警戒心を強めた明も、1633年に新国王尚豊を琉球国王に冊封した。翌年、薩摩藩は、尚豊の代替わりを感謝する使節（謝恩使）を將軍家光に送ったが、このとき幕府は琉球の役割を「唐口の商売」（中国貿易）とした。1639（寛永16）年にポルトガルと断交した際、幕府は対馬藩・薩摩藩に、それぞれ朝鮮口・琉球口で中国産生糸・絹織物などの輸入に努めるように命じている。

なお謝恩使は、將軍の就任を祝う慶賀使とともに定例となり、ペリー来航の直前まで続いた。



▲ 奄美での砂糖の取り引き 幕末に薩摩藩士によって描かれたもの。（『南島雑話』、奄美市立奄美博物館蔵）

近世の琉球と奄美

薩摩藩の支配を通じて、近世琉球の国家・社会・文化が形成された。まず、古琉球以来の伝統的な宗教儀礼と政治を切り離して、王府の組織を合理化し、黒糖・ウコンなどの専売制によって王府財政の再建がはかられた。藩へ年貢などを上納するため、農村支配を整備・強化し、農業生産を奨励したので、王国は貿易型から農業型に変貌した。人口も増加し、首都首里と那覇が都市として発展し、それまで在留していた外国人（華人・朝鮮人・日本人など）も琉球人の戸籍に編入された。士族と百姓からなる身分制が確立し、士族を中心に伝統社会・文化が成熟して、歌謡集「おもろそうし」の編纂などがおこなわれた。

中国（明・清）との朝貢貿易は琉球王国の解体（1872〔明治5〕年）までおこなわれたが、藩の出資による代理貿易であり、日中両国政府の政策や明清交替などの政治変動などで、藩が期待したほどの利益はあがらなかった。そのかわりとなったのが、年貢（貢米・貢糖）と琉球の特産物、とくに黒糖の専売である。

黒糖は王府・藩を通して大坂市場で売られて大きな利益をあげ、藩財政の主要な柱となった。日本人の生活水準が向上するとともに、黒糖の需要も高まってきた。19世紀にはそのほとんどを薩摩藩がまかかった。その70%以上を生産した奄美3島は、実質的な藩の植民地として、黒糖生産のためのモノカルチャー社会とされ、貨幣の流通も禁止されるなど、きびしい搾取のもとにおかれた。

◀ 琉球の使節 1710（宝永7）年、江戸城へ向かう琉球使節の一行。（『琉球中山王両使者登城行列』、国立公文書館蔵）





▲1 桜田門外の変 水戸藩を脱藩した浪士の一部が、江戸城に向かう途中の籠に乗った井伊大老を暗殺した。(茨城県立図書館蔵)



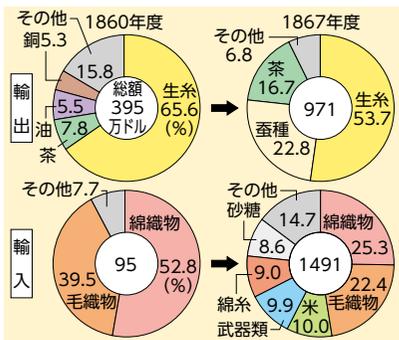
▲2 横浜本町通りのにぎわい 横浜村の住民をすべて移転させ、税を徴収する幕府の連上所を境として、東側に外国人居留地、西側に日本人商人町がわずか数か月でつくられた。幕府は横浜への出店を奨めたがふるわなかったため、三井などに店を強制した。左角には三井の店がみえる。(横浜開港資料館蔵)

13代将軍家定の継嗣問題において、一橋慶喜をおおしていたグループの便宜的呼称。徳川慶福をおすグループを南紀派とよぶ。

1858年、無勅許条約に抗議した一橋派大名に謹慎を命じたことからはじまった幕府の弾圧。翌年まで続き、処罰者は100名以上。橋本左内(1834~59)・吉田松陰・梅田雲浜(1815~59)・頼三樹三郎(1825~59)らが処刑された。

日米修好通商条約では、東海道の宿場町である神奈川を開港することになっていたが、幕府は外国人の管理や防衛もしやすい横浜村を開港地とし、新たに港や町を建設した。

横浜港における輸出入品割合 当初は輸出額が輸入額を上回っていたが、1866年の改税約書で輸入関税が引き下げられたことで、輸入額と輸出額が逆転した。(『増訂港都横浜の誕生』)



## 55 開港は国内にどのような影響をあたえたのか

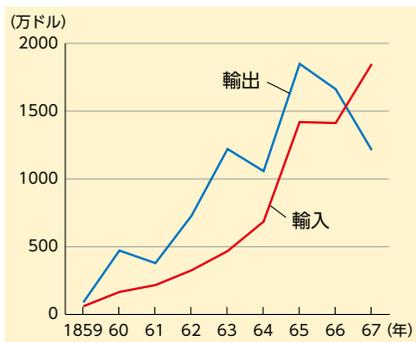
### 将軍継嗣問題

ペリ一航直後に13代将軍に就任した徳川家定(在1853~58)には継嗣(後継ぎ)がいなかったため養子をとる必要があった。親藩(福井藩主の松平慶永など)・外様大名(島津斉彬・山内豊信など)や一部の幕臣(川路聖謨・岩瀬忠震など)は、御三家の水戸藩主徳川斉昭の実子である一橋家当主徳川慶喜を継嗣におし、譜代中心で政治をおこなおうとする幕府に対して改革をうながそうとした(一橋派)。しかし、1858年4月、譜代大名筆頭の井伊直弼が大老に就任し、彼らのおす、将軍と血統の近い紀伊藩主徳川慶福(のちの家茂)が継嗣にむかえられた。

### 安政の大獄

幕府は条約勅許を得ようと朝廷への工作をおこなったが、一方、一橋派は慶喜を継嗣に推挙してもらおうと、朝廷と接近した。朝廷は水戸藩に対して無勅許条約を調印した幕府を責める戊午の密勅を発した。井伊大老は、これを幕政批判として、それらにかかわった大名や藩士、公卿などを前例のないほど大規模に処罰した(安政の大獄)。しかし1860年3月、井伊は江戸城の桜田門外で水戸藩浪士らに暗殺された(桜田門外の変)。

井伊の後を継いだ老中安藤信正と久世広周は、幕府の強硬な態度を改めて、朝廷と幕府の宥和政治(公武合体策)を進め、孝明天皇の妹和宮を將軍家茂のもとに嫁がせることに成功した。一方で幕府は、その交換条件として、将来、攘夷を実行することを朝廷に約束した。しかし、1862年1月、安藤は和宮降嫁に憤激する尊王攘夷派浪士に襲撃されて失脚した(坂下門外の変)。こうして幕府の権威はますます失墜した。



▲4 輸出入額の変遷 (『幕末貿易史の研究』)



▶5 物価騰貴を風刺する錦絵 扇ごとにさまざまな商品名が書かれている。(国文学研究資料館蔵)

### 貿易の開始とその影響

1859年6月、<sup>よこはま</sup>横浜・<sup>はこだて</sup>長崎・箱館で自由貿易がはじまった。日本の輸出品は<sup>きいと</sup>生糸・<sup>さんしゆ</sup>茶・<sup>さんらん</sup>蚕種(蚕卵紙)などがおもで、輸入品には綿織物・毛織物のほか武器・艦船・金属(鉛・錫・鉄)などが多かった。最大の貿易相手国はイギリスで、アメリカ・フランスがこれに次いだ。

生糸の輸出量の増加は、製糸業のマンユファクチュア(工場制手工業)の発達をうながしたが、国内での品不足を引きおこした。また在郷商人が直接横浜に出荷したため、これまでの江戸の問屋商人を介した流通システムが解体した。このため、幕府は1860年に<sup>ごひんえどかいそうれい</sup>五品江戸廻送令を出し、<sup>ざっこく</sup>雑穀・<sup>みずあぶら</sup>水油・<sup>ろう</sup>蠟・<sup>こふく</sup>呉服・生糸を産地から江戸へ送ることを命じたが、あまり効果はなかった。

国内の消費物資の欠乏、金貨の国外流出、<sup>まんえんかいしゆう</sup>万延改鑄による貨幣市場の混乱、幕府・諸藩の米の買い占めは、物価の高騰を招き、庶民や下級武士の生活を圧迫した。各地で百姓一揆や打ちこわしが続いていたが、下級武士の中にはその原因を開国に求め、幕府への不満をあらわすとともに、攘夷と称して、外国と取り引きする商人への襲撃事件をおこす者もあらわれた。アメリカ公使の通訳官であった<sup>ひゅーすてん</sup>ヒューステンが惨殺されたり、イギリス仮公使館である<sup>とうぜんじ</sup>東禅寺が二度にわたって襲撃されたりした(東禅寺事件)。

### 尊王攘夷論

『大日本史』編纂のなかから生まれた水戸学では、<sup>ふじたゆうこく</sup>藤田幽谷・<sup>とうこ</sup>東湖親子や<sup>あいざわやすし</sup>会沢安(正志斎)が、尊王論に外国勢力を排除しようとする攘夷論を結びつけた尊王攘夷論を説いた。攘夷論者である<sup>よしだしょういん</sup>吉田松陰は、敵国研究のためにアメリカへの密航を企て、失敗後は<sup>しょうか</sup>松下村塾で多くの長州藩士を教育した。尊王攘夷論は、実際に外国人が日本に入ってきたことによって、狂信的な政治運動と結びつき、幕末の政治に大きな影響をあたえた。



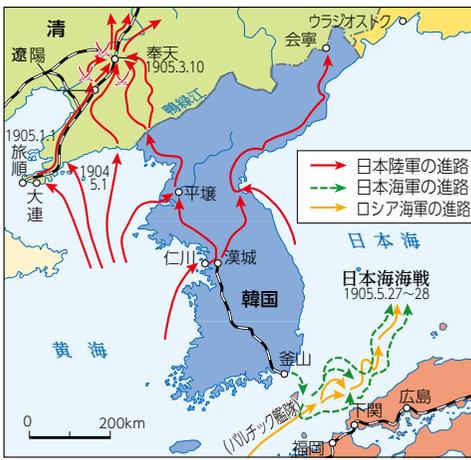
▲6 安政小判(左)と万延小判(日本銀行貨幣博物館蔵)

4 蝦を紙に載せて卵を生みつけさせたもの。1860年代、ヨーロッパで<sup>か</sup>蚕の病気が流行したため、日本からヨーロッパへの輸出が増大した。

5 「一分銀」を小判(金貨)と交換すると、金銀交換比率は1対5となった。外国では1対15であったため、外国人は大量の銀貨(メキシコドル)を「一分銀」に交換し、さらに小判などの金貨と交換し、国外へともち出した。このため、幕府は万延小判など質の低い金貨を大量に発行して対応したが、はげしいインフレーションを招くこととなった。

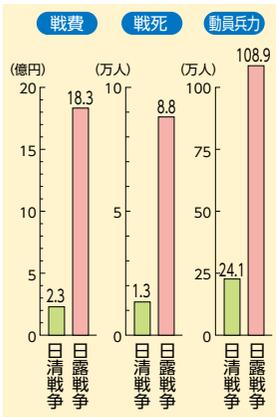
### 探 究しよう

- 1 開港によって、日本の政治・経済はどのような影響を受けたのか考えてみよう。
- 2 日本人は外国人に対してどのような感情をもっていたのか考えてみよう。
- 3 開港場とは、どんな場所だったのか調べてみよう。



◀2 「三笠」艦橋の東郷平八郎 日本海海戦直前の戦艦三笠の艦橋のようすを描いている。画面中央が東郷平八郎(1847～1934)、右から3人目が作戦担当の参謀秋山真之(1868～1918)。(東城鉦太郎画「三笠艦橋の図」、記念艦三笠蔵)

◀1 日露戦争要図



▲3 日清・日露戦争の比較 (『日本史料集成』)

## 70 日露戦争はどのような戦争だったのか

### 日露戦争

1904年2月8日、日本軍は韓国の仁川や中国の旅順でロシア艦隊を攻撃し、日露戦争がはじまった。日本軍はたちまち朝鮮半島のほとんどを占領すると、韓国・中国の国境をこえて満州に進撃して、後退するロシア軍を追って北上した。

開戦前、国民は、世界最強の陸軍国と思われていたロシアと戦うことに強いおそれと緊張感をもった。しかし、開戦後の連戦連勝の報道によって、緊張感は熱狂へとかわった。祝勝会や提灯行列が全国各地でおこなわれた。動員兵士数は日清戦争にくらべてはるかに多く、約100万人にもおよんだ。こうしたなか、幸徳秋水・堺利彦ら社会主義者は『平民新聞』で反戦論を展開し、キリスト者の内村鑑三も非戦論を主張した。また、与謝野晶子や大塚楠緒子は、詩などで反戦・非戦の情をうたったが、これらの声は国民の戦勝感によってかき消されがちであった。

日露戦争では、18億3000万円という多額の戦費を必要とした。桂太郎内閣は内債で6億4000万円を募集したが、それでもならず、外債7億円を同盟国のイギリスや好意的中立を保つアメリカで募集した。また、大幅な増税をおこなったため、消費者物価が高騰した。

日本軍は、多数の死傷者を出しながら旅順を陥落させ、1905年3月に奉天(現在の瀋陽)を占領した。さらに、同年5月、ヨーロッパ方面から回航されてきたロシアのバルチック艦隊を日本海海戦で破った。

### 日比谷焼き打ち事件

日本は兵員・兵器の補給や戦費調達のため限界に達し、ロシアも国内に革命状況をかかえ、ともに戦争を続けられる状況ではなかった。アメリカ大統領セオドア・ローズヴェルトの斡旋で、アメリカのポーツマスで日本とロシアの講和会議が開かれ、1905年9月、日本全権小村寿太郎とロシア全権ウイッテの間

1 日清戦争を「義戦」とした内村鑑三は下関条約の内容をみて、朝鮮の独立確保が日本の進出の口実にすぎないことを知り、以後、「戦争の利益は強盗の利益である」として、戦争の絶対的廃止を説いた。

2 与謝野晶子は雑誌『明星』(1904年9月号)で戦地にいる弟を嘆いて「君死にたまふこと勿れ」と題する反戦詩を、大塚楠緒子は雑誌『太陽』(1905年1月号)で戦地の夫を思う妻の心情を詩にした「お百度詣」を発表し、注目を集めた。

3 日露戦争後、戦没者を英霊としてまつた忠魂碑が、日本各地の小学校の校庭や神社の境内などに多数建設された。



◀4 ああ増税 元老・御用商人などは、日露戦争によって行賞を得たが、一般国民は、「増税」という行賞しか得られなかったという風刺。(『東京パック』明治41年5月20日号)



▲6 愛媛県松山のロシア人捕虜収容所

▶5 日比谷焼き打ち事件 市街電車を焼き打ちする民衆。



◀地域の視点▶

### ◆捕虜と松山

明治国家は西欧列強から「文明国」として認知されることを強く意識したため、昭和期と違って、戦争捕虜の扱いが人道的であった。日露戦争では松山収容所を最初として、全国で29か所に開設された。松山収容所は将校の収容率が高いこともあって、捕虜の待遇がよく、例えば将校は決まった曜日・時間に市内を散歩することも可能であった。

で講和条約が結ばれた(ポーツマス条約)。その内容は、ロシアは(1)日本の韓国に対する指導・保護・監理措置を認める、(2)清朝政府の承認を条件

に、旅順・大連の租借権と東清鉄道南部支線(長春-大連-旅順間)を日本へ譲渡する、(3)北緯50度以南の南樺太を日本へ割譲する、(4)沿海州・カムチャツカ半島における日本の漁業権を承認する、というものであった。

増税や物価高に苦しんでいた民衆は、高揚した戦勝感のなか、賠償金の獲得を強く求めていた。しかし、ポーツマス条約で賠償金が得られないことがわかると、東京の日比谷公園で開かれた講和問題同志連合会主催の国民大会に、数万人の民衆が詰めかけた。さらに民衆と警官との乱闘をきっかけに東京全市で暴動がおり、内相官邸や警察署・派出所、キリスト教会などが破壊された(日比谷焼き打ち事件)。警察だけでは收拾不能と判断した桂内閣は戒厳令を施行し、軍隊を出動させた。

日露戦争における日本の勝利は、インドやベトナムなど、西欧列強の植民地であったアジアなどの諸民族に刺激をあたえ、民族運動が活発化した。しかし、日本自体は、アジアの諸民族の期待を裏切って、新しい帝国主義国としてアジア諸民族にのぞむことになる。

### 日本の満州進出

1906年、日本は、関東州を統治するために旅順に関東都督府を設置し、一般行政と警察を担当させた。

関東都督には現役の陸軍大将・中将が任命され、旅順-大連-長春間の鉄道を守備するため、軍隊を指揮下においた。また同年、旅順-長春間の鉄道を経営する機関として、南満州鉄道株式会社(満鉄)が設立された。この満鉄は、総裁・副総裁が天皇の勅裁をへて政府によって任命される国策会社であった。満鉄は、満州産の大豆などの農産物を輸送するだけでなく、撫順・煙台の石炭採掘業や水運業・電気業、鉄道付属地内の土木・教育・衛生に関する行政もおこなった。

4 ポーツマス条約で、日本はロシアが清から獲得した満州における権益を譲渡されたが、これには、清朝政府の承認という条件があった。そこで日本は、1905年末にその権益の譲渡を清朝政府に認めさせた。ポーツマス条約でロシアから受け継いだ遼東半島の日本の租借地は、万里の長城の東端の山海関以東にあたるために、関東州とよばれるようになった。

### 探 究しよう

- 1 日露戦争に対してどのような意見があったのか調べてみよう。
- 2 身近な地域からどれくらいの兵士が動員されたか調べてみよう。
- 3 なぜ日比谷焼き打ち事件がおきたのか考えてみよう。

## 職業婦人の増加

大正時代には、女性たちの社会進出が進み、一定の雇用関係のもとに働いて報酬を得る職業婦人が増加した。職業婦人が増加したことは、女性の生活にとっては産業革命に匹敵するほどの大きな変化であり、家制度の束縛から解放されるという意味をもった。しかし、その裏には、女性の低賃金という問題が隠されていた。男性教員二人分の賃金で女性教員3～4人を雇うことができるという、雇う側にとっての低賃金の魅力が、職業婦人が増加する最大の要因であった。

当時の初任給は、小学校の男性教員が12～20円、巡查15円、大学卒の銀行員40円、高等文官試験合格の公務員70円で、国会議員の月俸は250円、総理大臣の月俸は1000円であった。

一方、右の絵は、大正時代はじめの女性労働者の給料を示したものである。右下に描かれた「判任官」（下級の公務員）は月俸25円、和服の上に白いエプロンをかけた女性はカフェーとよばれた喫茶店の女給で月俸8円、輸出業を支えた工女は月俸6円である。裸体のモデルは半日50銭で、月に20日働いても月給10円にすぎないが、裸体モデルが職業として登場したことがわかる。

## 新しい女

職業婦人の増加や雑誌『婦人公論』、『主婦之友』など女性向け出版文化の展開により、女性の社会進出や家族・夫婦についての議論がもりあがりをみせた。

1911（明治44）年、平塚らいてうら5人の女性を発起人に、与謝野晶子ら7人の文学者を賛助員と



◀ 平塚らいてう（明）母性保護論争に加わる一方、市川房枝・奥むめおらとともに1920年に新婦人協会を結成、婦人参政権運動・消費組合運動にも関与した。



▲「女給料取りのいろいろ」（『東京パック』1915年10月15日号）

して青鞥社が結成され、雑誌『青鞥』が創刊された。この名称は、18世紀のなかごろ、文芸を談ずるイギリスの婦人たちが青い靴下すなわち青鞥（ブルーストッキング）を履いたことにちなんでつけられた。らいてうが創刊の辞として書いた「元始、女性は実に太陽であった」という文章は、女性を束縛する家制度とそれを支える上からの権威、道徳や良妻賢母に疑問をいだし、女性としての生き方を模索する若い知識層の女性たちを勇気づけた。また、らいてうが雑誌『青鞥』に発表した文章の署名は、本名の平塚明ではなく、らいてうという、平塚という姓を冠していないひらがなの4文字であった。奥村博史との結婚に際し、『青鞥』（1914年2月）に発表した「独立するに就いて両親に」では、「現行の結婚制度に不満足な以上、そんな制度に従ひ、そんな法律によっては認してもらやうな結婚はしたくない」と述べ、長い間婚姻届を出さなかった。

一方で、こうした新しい女たちに対する反発も強かった。らいてうたちが上流階級の出身であったこともあり、すべての女性たちから支持されたわけでもなかった。毎日の生活に明け暮れていた女性たちには、別世界での主張にすぎなかったのである。

**?** GHQはなぜ持株会社を解体させようとしたのだろうか？ その持株会社がのちに復活したのはなぜだろうか？

**史料** 独占禁止法改正の経緯 (平成八年度公正取引委員会年次報告)

持株会社については、昭和二十二年の独占禁止法の制定以来、…その設立・転化が全面的に禁止されてきた。しかし、…経済界を中心にして、これまで数次にわたりその規制を緩和すべきとの要請が行われてきたほか、最近においては、企業活動のグローバル化、我が国経済における産業の空洞化の懸念といった内外の諸情勢の変化を背景として、規制緩和を推進する観点から規制の在り方を見直すべきとの主張がなされていた。

**史料** 持株会社の解体 (持株会社ノ解体ニ関スル覚書) 抜粋、一九四五年)

三 日本帝国政府ハ…、三井本社、安田保善社、住友本社及ビ株式会社三菱本社、並ニ三井、岩崎、安田及ビ住友一家ノ家族若クハ一切ノ彼等ノ代行者ニヨル一切ノ不動産若クハ不動産(右ニハ証券並ニ其ノ他ノ所有権、負債又ハ支配権ノ証拠物件ヲ含ム)ノ売却贈与譲渡又ハ移転ヲ禁止スベシ。

＜地域の視点＞  
◆農地改革と東北の大地主

農地改革は、近世以来の大地主にも大きな打撃をあたえた。山形県酒田市を拠点とした本間家は江戸時代中期に本間光丘が事業を拡大して大規模に田地を集積し、のちに「日本一の地主」とよばれた富豪家であった。山林などの資産は残ったものの1500町以上ともいわれた田畑は試験田4.1町歩を残して解放され、地域政財界における影響力を低下させていった。本間家は同様に多くの土地を失った秋田県の池田家、宮城県の高橋家など東北地方のほかに大地主とともに広大な邸宅が文化財として保存され、往時の繁栄を伝えている。

2 325社が指定されたが、占領政策の転換にともない、実際に分割されたのは日本製鉄・三菱重工業など11社のみであった。また、財閥解体において、財閥系銀行は解体されなかったため、以後経済再建の核となり、銀行を中心とした企業集団が形成された。

3 1947年の総選挙は、中選挙区制がとられた。

- 探 究しよう**
- ① 農地改革はどのような成果をあげ、どのような課題を生んだのか、説明してみよう。
  - ② 1945年～48年の間に短命な政権が続いたのはなぜか考えてみよう。
  - ③ 戦後改革は、それまでの社会をどうかえたのか、その影響について説明してみよう。

足し、戦前は非法とされた**日本共産党**も再建された。

占領期の政治は、冷戦の開始などの国際情勢のもと、GHQの占領政策と食糧難や不況への対策を訴える社会運動の圧力のなかでゆれうごいた。その結果、戦前の政党政治の流れを引き継ぎつつも、当初は圧倒的な多数党が生まれず、自由党などの自由主義勢力や社会党・進歩党などの左派・中道勢力などが連立や分裂、統合をくり返した。

**占領期の政治**

1946年4月、戦後初の総選挙がおこなわれ、日本自由党が第一党となった。しかし、選挙直前に日本共産党をのぞく各政党から大量の公職追放者を出したことや、大選挙区制を採用したこともあって、過半数をとることができなかった。鳩山一郎の公職追放をうけて、新たに日本自由党の党首となった**吉田茂**が、幣原喜重郎にかわり進歩党との連立によって内閣を組織した。

新憲法の制定や農地改革を進めた第1次吉田内閣に対し、経済政策に反発する労働運動がもりあがり、新憲法公布後の1947年におこなわれた総選挙では、自由党が敗北した。吉田内閣にかわって、選挙で躍進し、第一党となった社会党の**片山哲**が、民主党(進歩党が再編された)に国民協同党を加えた3党の連立内閣を組織した。片山内閣は労働省の設置を実現し、統制による経済の安定をめざしたが、炭鉱国家管理問題や予算をめぐる内部対立が表面化して、半年あまりで総辞職した。

1948年3月には片山内閣と同じ3党の連立で、民主党の**芦田均**が内閣を組織した。しかし、芦田内閣は**昭和電工事件**で倒れ、10月には第2次吉田内閣が誕生した。与党の民主自由党は、政権を維持できなかった左派・中道連立政権への不満を追い風に翌年1月の総選挙で勝利し、戦後初の過半数政党となった。こうして、多数党を与党とした吉田内閣が、冷戦を背景に転換するアメリカの対日政策のにない手となった。

これまで学んできたことがらをふまえ、現代の課題の背景となる歴史について、さまざまな資料を活用しながら探究してみよう。また、その成果をまとめ、クラスで発表したり、議論したりしてみよう。

身近な地域や身の回りのできごと、最近のニュースなどから、題材を探そう。その際には以下のようなテーマからアプローチしてみよう。

- ① 社会や集団と個人：ある事件が社会に与えた影響や、人々がそのなかでどのように考え行動していたかを探る。
- ② 世界の中の日本：身近な地域の歴史が、アジアや世界の歴史とどのように結びついていたのかを探る。
- ③ 伝統や文化の継承と創造：身の回りでおこなわれている祭礼・行事などの歴史を調べ、どのように受け継がれてきたのか、どのように変容してきたのかを探る。

## 主題を設定する

### ー1. 江戸時代の火山災害

AさんやBさんは、近年、日本で大きな災害が続いていることに興味をもった。そして日本史の学習を通じて、歴史上も地震や噴火などがくり返しおきたことを知った。そこで教科書にも載っている江戸時代の天明期におこった浅間山の噴火を題材に、次のような問いを設定して探究することにした。

#### Aさんのテーマ

大きな災害がおこると社会や人々の暮らしは多大な影響をうけ、復興にもさまざまな課題がある。歴史の中ではどのよ

うな災害があり、人々はどのように復旧・復興を進めたのだろうか？

#### Bさんのテーマ

マスメディアやインターネット、SNSが発達した現代では、災害に関する情報が飛び交う。正確な情報だけでなく誤った情報も広がることもある。昔は災害についてどのような情報があり、人々はそれをどのようにして集め、伝えたのだろうか？

#### 問い 人々は災害とどのように向き合ってきたのか

関連するテーマ：① 社会や集団と個人

## 資料を集め、仮説を立てる

主題に関する資料を集めよう。

- 図書館やインターネットで関係する文献や記事、資料集などを検索してみよう。
- 博物館・資料館では、地元の歴史に関する資料を収集・保管していることが多い。学芸員などに助言をもらうのもよいだろう。
- 過去の災害については、さまざまな団体が調査・研究成果をまとめ、公表している場合がある。石碑や供養塔などが建てられていたり、伝承が残されたりしている地域もある。現地調査もしてみよう。

### 浅間山天明大噴火の概要

浅間山は長野県と群馬県の境に位置する。歴史上、しばしば噴火をくり返していたが、江戸時代の1783（天明3）年におきた噴火は最大規模のものである。噴火は4月7日（旧暦。以下同じ）にはじまり、7月6日から8日にかけて最高潮をむかえた。134ページ図1は7月7日のようすを山の

#### ▼1 浅間山と関東地方

